

第12分科会 自立と共生の実現に向けた教育活動の推進と校長の在り方

誰一人取り残さない文化を 醸成する学校経営の推進

～多様性の公正な包摂を意識した特別支援教育の省察から～

福井県大野市有終南小学校 校長 芦原 邦弘

研究の背景：福井県大野市の現状と重点課題

！ 過疎化・少子化に伴う学校再編が進行中

- ・ 14 小学校（H1）⇒ 7 小学校（R8）
- ・ 市校長会メンバーの大幅な減員 ⇒ 強みへ！

「大野っ子育成プラン」が掲げる重点事項（一部抜粋）

- ✓ 安心して通える園・学校づくり
- ✓ 居場所づくりと絆づくり
- ✓ こども視点での組織的支援

⇒ **誰一人取り残さない学校づくりの基盤となる指針**

⇒ **特色を生かした教育活動を各小学校で展開中**



天空の城「越前大野城」



星空保護区®「南六呂師エリア」

研究テーマについて

“

**誰一人取り残さない文化を醸成する学校経営の推進
～多様性の公正な包摂を意識した特別支援教育の省察から～**

”

普遍的な教育理念

学びや生活の土台を強固に整えることが持続可能な社会と幸福な人生を創る力を育てる学校づくりへの第一歩であると考えている。

校長の関わり・役割とは

教育理念を“文化”として醸成する学校経営の実現に向けて、校長が果たす役割や関わりを各小学校の取組から明らかにしたい。

市校長会の研究の概要

■令和6年度

○東海・北陸地区小学校長会教育研究三重大会（R7・10月）に向けた研究

- ・「実態把握」「組織的支援」「環境整備」「授業改革」の視点が重要
- ・全ての児童が自分らしく輝ける学校を目指し、学校が一体となって推進するシステムづくり
- ・「フリートークを活用した協同的な学び」の成果を共有

■令和7年度

○新たな研究テーマのもと、校長の関わり方や役割についての研究

- ・特別支援教育に関するアンケートの実施と考察
- ・各校の実践共有を通して校長の役割について知見を深める



名水百選「御清水」



七間朝市

アンケートから見える校長の役割

※市内全小学校長の意識調査結果（複数回答）

「特別支援教育推進における校長の果たすべき役割は？重視する方策は？」

果たす役割：【組織づくり】

67%

果たす役割：【人材育成】

67%

重視方策：【個別指導・教育計画の作成】

78%

重視方策：【チームによる支援体制】

67%

【考察】 適切な校務分掌、強みを生かす人員配置、外部人材と繋ぐネットワーク形成など、**「組織マネジメント力」**が求められている。また、個別の教育支援計画などの作成や支援体制の構築など、**「組織全体での取組」**が重要視される。

特別支援学級在籍児童数の推移



➡ 要支援児の割合は右肩上がり

➡ 「特別支援教育指導員」の配置

特別支援教育指導員について

- 令和 7 年度より、市が会計年度任用職員として 1 人配置（教員OB）
- 市内全小中学校を定期的に巡回
- 気がかりな子どもの観察や見立て
- 支援のあり方に関する助言
- 特別支援学級担任へのアドバイス
- 校内支援委員会での助言
- 管理職の相談役

各小学校の実践の発表（全9小学校）

※令和7年度末休校の2校を含む

■各小学校の取組

■成果

■校長の関わり・役割

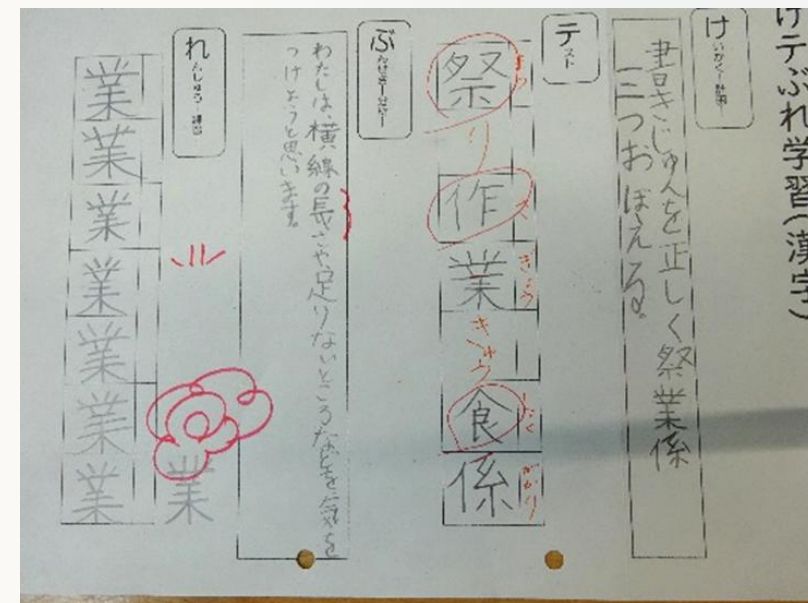
A小学校の実践：個に応じた「けてぶれ」学習の工夫



「けてぶれ」で学びのメタ認知能力を育む

特別支援学級（知的）において、【計画・テスト・分析・練習】を1サイクルとする「けてぶれ」学習に取り組みました。

- ✓ 自律的学習：「どこがダメか」「どうすべきか」を主体的に思考。
- ✓ 能力に応じた成果：受け身の学習から脱却し、高い自己決定力を伴う学びを実現



校長の関わり・役割

実践当初は困難を想定していましたが、教員の「やってみたい」というモチベーションを重視し、「失敗しても次の糧になる」と実践を承認。校長は、研究主任と他の教員の連携を橋渡する形でサポートをしました。

B小学校の実践：組織マネジメントと若手育成



迅速な「チーム支援」体制の仕組み化

- ✓ 子どもを見つめて（週2回）
終礼時、個別の支援が必要な児童の情報共有を徹底。
- ✓ 特コミーティング（週1回）
コーディネーター・支援員・相談員による会議の定例化。問題発生から極めて短いスパンでの解決を可能に。

「特別支援の視点」をもつ教員育成方針

- ✓ 新採用教員の戦略的配置
あえて早い段階で新採用教員を特別支援学級に配置し、特別支援の視点（個を見つめる目）を育成。
- ✓ チーム指導の徹底
ベテランと若手を組み合わせ、安心して指導できる体制を整えました。

校長の関わり・役割：年度当初からの計画的な仕組み化

「子どもを見つめて」等を年度初めから教育計画に位置付けました。校長として、各種研修への参加を強力に促し、中長期的な教師の資質向上を牽引しています。

C小学校の実践：安心できる静かな教室環境への移行



1階・児童玄関横へ特別支援学級の教室を配置移動

1階と3階に分散していた特別支援学級の教室を、1階の静かなエリアに集約するなど教室配置の最適化を図りました。



- ✓ **不安感の払拭**：パーティションで仕切る従来の構造を変更し、遮音とプライベート空間を確保

- ✓ **安心できる居場所**：5つの小部屋から成る独立した「静かな棟」を実現

校長の関わり・役割：合意形成と市教委への働きかけ

全教職員との共通理解を段階的に進め、夏季休業中の大移動作業を実行しました。また、音が大きく、温度調整ができない空調設備に対し、迅速に市教育委員会へかけ合い、新しいエアコンを設置しました。



D小学校の実践：縦割り班活動による社会性の育成

日常に溶け込む「異学年交流」の活性化

意図的に日常生活の中へ「縦割り班」での清掃やレクリエーションを数多く導入。特別な日だけでなく、常に異なる学年が支え合う素地を創出しました。

- ✓ **上学年の自己有用感**：下学年の面倒を自然と見る、自立した姿勢の獲得
- ✓ **下学年の安心感**：気軽に相談できる頼もしい先輩像を身近に体験

校長の関わり・役割：「すべての人を大切にする」学校運営

校長自身が児童や職員一人一人を深く「知る」ことを重視。すべての子どもにとって居心地のよい環境を整備する出発点は、学校にいる全ての大人・子どもを例外なく大事にすることから始まると唱え、推進を主導しました。



E小学校の実践：外部機関連携と子ども理解



多角的な記録共有と丁寧な子ども分析

- ✓ **就学支援委員会・ケース会議の定例化**
専門機関を交え、最適な学びを保证するための会議を実施。
- ✓ **「毎日の地道な記録」の蓄積**
教育支援員・相談員が児童の微細な様子や変化を克明に日誌に記録。教師の見えない児童の本音や変化を早期に発見。

保護者への説明責任と信頼構築

- ✓ 特別支援を特定の担任・担当に任せきりにするのではなく、「**全教職員が自分事**」として捉える研修を実施。
- ✓ 専門的な分析エビデンス（客観データ）をもとに保護者と将来を見据えた支援方針を丁寧に共有することで、深い相互信頼を確立しました。

校長の関わり・役割：組織化と客観エビデンスに基づく責任ある判断

ケース会議や委員会の形骸化を徹底的に排除。外部機関連携を進める方針を明示し、専門的視点の導入において最終判断に校長自身が責任を果たすことで、教員を精神的にも支援しました。

F小学校の実践：フリートークを活用した協同的な学び

「聴く・気付く・考え、他者と折り合う」

どの学級・どの授業でも質の高い学びが保障されることを共通目標とし、「フリートークを活用した協同的な学び」を授業の核に据えて実践を積み重ねています。

- ✔ **他者と折り合う力**：他人の意見から気付きを得る。
- ✔ **学級の安心感**：特別支援学級においても毎日継続し、共に生きる風土を醸成。

校長の役割：仕組みと組織体制の構築

全ての子どもが自分らしく輝ける環境を整備するため、アンテナを高く張って、事実を把握し、予防的マネジメントを牽引しました。



G小学校の実践：全校を対象とした障がい理解教育

「かわいそう」を超え、自分事として考える心の授業



特別支援学級担任が主体となり、障がいのある・なしに関わらず、全校児童へ「障がい理解教育（出前授業）」を実施。

✔ **心のバリアフリー**：相手が抱える困難への共感的な見方を学ぶ

✔ **自発的行動**：単なる憐れみではなく、「自分ができるサポート・掛けられる言葉」を自分で考える機会を創出

校長の関わり・役割

特別支援コーディネーターと密に連携し、この授業が効果を上げるよう、教育課程の工夫（単発にしないカリキュラム設計）を主導。さらに、県教育総合研究所等の専門家を招いた職員研修を合わせて企画しました。特別支援学級担任の専門性を全校へ波及させ、全校で「違い」を受け入れ、気持ちよく暮らす態度を多面的に培う風土づくりに努めました。

H小学校の実践：自立活動における地域との交流



「地域に学び、共に自立する」ふるさと学習

特別支援学級の「自立活動」の時間を活かし、地域住民の方々を学校に招いて、野菜の収穫や調理実習を協働で行いました。

- ✔ **安心できる適度な緊張感**：普段接しない大人との触れ合いにより、
落ち着いて活動する力を習得
- ✔ **成長できる場**：温かな励ましが成功体験となり、児童の自己有用
感・達成感が最大化



校長の関わり・役割：交流を一方的な「支援」にしない

単なる「お手伝い」「福祉支援」ではなく、「共に学び合う対等な機会」と定義。校長自ら地域への橋渡し役を務め、活動を自校の学校だより等で積極的に地域へ継続的に発信しています。

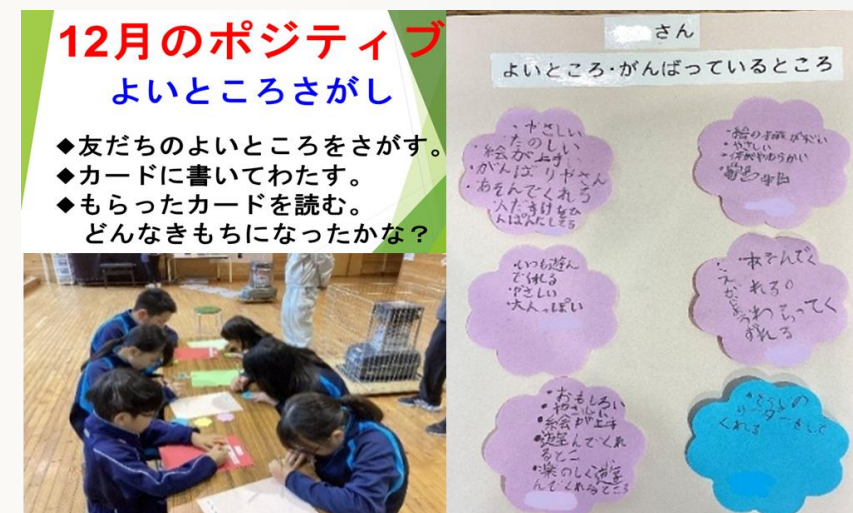
小学校の実践：小規模校におけるポジティブ教育

固定化された人間関係を打開する取り組み



全校児童わずか7名の極めて小さな山間部小規模校。関係が深く固定化しがちだからこそ、ポジティブ教育の研究を行いました。

- ✓ **ソーシャルスキル教育**： いじめ等の予防、基礎的な対人マナーの習得。
- ✓ **ピア・サポート活動**： お互いに認め合い、支え合うための技術を修得。
他者の「あの子はこの子」という一面的ラベルからの脱却。



校長の関わり・役割：校長自らが教鞭を執る

児童関係の固定化に危機感を覚え、令和7年度1学期より、**月1回の全校朝礼を「校長自ら行うピア・サポート」の時間に設定**。校長が手本を見せることで、全校での実施を可能にし、また全職員がその指導法を客観的に見学（参観）するOJT研修の場として活用しました。

研究の成果：文化を醸成する校長の関わり・役割



1. 「組織的・計画的な支援体制」の構築

特別支援コーディネーターや外部専門機関、支援員などと連携する「仕組み」を整えることで、個々の事案に迅速かつ組織的に対応が可能となった。



2. 校長の伴走による「教職員の資質と意欲」の向上

校長が、「けてぶれ」のような教員の主体的な挑戦を承認し、伴走することで、自己有用感が上昇。特別支援教育を全員の「自分事」にする文化の醸成につながった。



3. 共生社会の土台の確立

教室の物理配置の見直しやフリースペース、ピア・サポート等の他者を理解する教育の推進などを多角的にマネジメントすることが児童の中に多様性や価値観を認める「共生の文化」を作った。

今後の重要課題

「持続可能な自立と共生の教育に向けて」

✓ 多様化・複雑化するニーズへの「合理的配慮」

支援を要する児童の増加や人員不足への対応、限られた人的資源の中で実効性のある合理的配慮を継続させるためのさらなる校長のマネジメント力が問われている。

✓ 保護者との合意形成と「信頼関係」の深化

アセスメント結果や支援方針について、保護者の理解や協力を得ることが困難な場合も。外部機関と連携し、家庭と学校が車の両輪となる体制づくりが重要。

✓ 「持続可能な文化」としての「定着と共有」

教職員や管理職の異動に左右されず、「誰一人取り残さない学校文化」が継承されるためのシステム化。学校間の好事例の共有し、地域全体で特別支援教育を推進するネットワークの構築。

ご清聴
ありがとうございました。



福井県大野市小学校長会一同